

米村貴裕

Ultimate Beast

ウルティメイト・ビースト

ソニー・ガリヴァー社

登場人物

西岡ドリム

名前がユニークな熱血漢の青年。そのとおり夢多き青年で、今回、まさかの出来事で異世界へ行くことに。

その際、ふたりの“女性”と出会って、自身の能力を開花させていき、異世界では思わぬ力を発揮する。

そんな力が、やがて宇宙、そして天地創世のキーとなる。

神崎リエ子

ファンタジー関連の知識が豊富な女子高生。ひよんなことからドリムと出会い、共に異世界へ突入する。

ドリムと違い物質的な“イメージの力”はあつかえないが、とても独特な力を持つ。彼女は“ふたり”のサポート役だったのだが……。

ヴィラーネ

赤銅色の大柄なドラゴン。

ドリムたちを異世界へ呼び寄せた張本人であり、名前のおとり“女性”としてふるまっている。彼女が「ヴィラーネ」であるときは、戦いを好まない。

次第にドリムとの一途な絆を強くしていくが、その真の正体とは——。

レム

気さくで小柄なワイバーン。ドリムたちと交換される形で、地球側へ投げ出されるはめに……。

異世界とつながった“電子の声”を聞ける異端児で、その能力がのちのち全時空間をも揺るがせる。

イザナギ

電子のトンネル効果を使い、異世界との接点を作った会社社長。

途方もない企みを胸に、イメージの力と反応する異世界の物質を狙う。

皇帝ダカルシア

この世（異世界）に永遠の安らぎをもたらす者とならん。

こう銘打ち世界の侵略を進めるが“待ちくたびれて”、さまざま暴虐を行う。地球のイザナギとも、つながりを持つ。

ウルティメイト・ビースト もくじ

第一章 ポーシヴが導く劇的な出会い

- (1) ドラゴンからのEメール／7
- (2) 生と死と肉体の「融合」／14
- (3) 大きな彼女と小さな彼女／41

第二章 惹かれゆく僕の心

- (4) VS・皇帝の合成獣、そして……。／51
- (5) ふたりへの恋慕とふたりだけの秘密／67
- (6) フローライトのブレスレット／88

第三章 愛しきビースト・ヴィラーネ

- (7) 皇帝の出現とヴィラーネの正体／108

(8) 託された彼女の牙と死に神／ 123

(9) ドリムがまねいた悲しき一撃／ 136

第四章 待ち受ける〈時空間〉の試練

(10) 本当の「融合」を示すとき／ 150

(11) 究極の世界への旅立ち／ 165

●スタッフ●

○編集

佐田 満

○表画・カット

藤川 祥

○校正

yuki

○表紙

デザインオフィスはな

○カバー

宇田川森和

第一章 ポーシヴが導く劇的な出会い

(1) ドラゴンからのEメール

ほの暗い地下牢で赤銅色のドラゴン、ヴィラーネは落胆の息を漏らしていた。

またも皇帝ダカルシアの命令どおり、異世界へメッセージを送ってしまったからだ。

この音を聞きつけたらしく、となりで拘束されている小柄で若く、緑色のワイバーンから弱々しい声が出てきた。

「僕たち、いいや、この世界はもうもたないよ……」

ヴィラーネはかろうじて動かせる四肢を限界まで張り、その声にも明るさを持たせた。

「わたしは信じているのよ、レム。きつと、この閉鎖されたときの輪を断ち切ってくれる生き物が現れるって、ね」

「どうして、そう言い切れるの？」との問いかけには、答えられなかった。これは単に、悲惨なまでの状況下で気が狂わないよう、自己保身しているだけかもしれない。

けれどヴィラーネは彼を精いっぱい元気づけるよう、「きつと……、ね」と言葉を繰り返した。そう、自分は「想い」をしかとメッセージに織り交ぜているのだから……。

同じとき、日本にある街中の一軒家に、快活な声が響く。

お決まりのシャツと青いネクタイ、そしてラフな黒ズボンをはきこんだ西岡ドリムは朝一番から、若干の興奮を覚えていた。部屋のかたわらにある

ノートPCが、スパムメールであつても騙されて
みたい一文を表示していたからだ。

「求む！ ドラゴン・ライダー」

彼は「夢」との意味合いでドリムと名づけられ、
小学校ではさんざん名前をからかわれたが文字ど
おり、夢多き青年となつていた。そんなドリムが
刈りこんだ髪をかきあげながら、メールの本文へ
目を向ける。

内容はタイトルと似通つていたものの、どこか、
そう痛切な想いがくみとれた。（とても奇妙な感覚
だな……）

そのままドリムは、肝心の発信者名を調べてい
く。差出人はイザナギ・コーポレーションとなつ
ており、さっそくドリムが検索をかけてみると、
その会社は実在し、電車で移動可能などところに位
置していた。

「また、あれこれ想像しているだけじゃダメだ。

行つてみるしかない！」と意思をこめるようにつ
ぶやき、狭い自室を後にした。ごきげんさんで玄
関を後にし、マウンテンバイクに跨る彼の頭には
現在、多発している青少年の連続失踪事件のこと
など、微塵もうかんでいない。

ドリムはプリントアウトした地図を片手に、電
車を乗り継ぎ、専門学校ではなく彼の目的地へ到
着していた。

木立の多いそこには白塗りのカベが真新しく、
中規模クラスの研究施設らしい建物があつた。そ
の狭いガラス窓からは、わずかに光が漏れている。

ドリムが正面玄関に目をやると、すでに淡いブ
ルーのワンピースがよく似合う、長髪の女性がお
とずれており、警備員となにかを言い合つていた。
（やはりあのメールはいたずらか、スパムだったの
かな？）

ドリムも歩み寄り、警備員とスレンダーな彼女

との言い合いに加わった。警備員と話したところ、ドリームにしてみても不審な点が多々、見受けられる内容だった。

この会社は確実に、なにかを隠しているに違いない——。

そんな姿を二階の窓ごしに眺める中年男性がいた。

かなり体格のいい男性は、この会社の社長ことイザナギ当人だった。シックな背広着のイザナギは、野太い声で大型機器を操作する研究員へ問いかける。

「ふふ、ドラゴンは子供に人気が高いからな。案の定、だ。今度はシンクロできそうかね？」

「それはまだ……。若い人間が持つピユアな意識を、存分に高ぶらせて実験せねばなりません」

「ピユアな意識か。ほとほと厄介な代物だ」とイ

ザナギは、ため息まじりに首を振った。

わが社が依頼された粒子加速器の高出力実験で突然、不可思議な「異世界」が確認されて一年あまり。それから独自に研究を進め、集積化された半導体などが引き起こす「トンネル効果」がキーであるとはわかった。

これは、電子のたぐいが様々な障壁を通過してしまう、おもしろい現象であり、さらに電子が生まれる場所についても現代科学では未解明だ。

よもや異世界からの電子を受信し、往來可能にできるとは考えてもみなかった。しかし電子より大きい物質の往來を……。つまりは「ミクロのトンネル」を目に見えるレベルにまで拡大するには、量子力学と関連する「意識」の介在が必要となるのだ。

とりわけ強く異世界を「惹きつける」ピユアな意識が……。

現代科学とかけ離れたテクノロジィを使う
試作装置は、相手からの情報ですでに構築してあ
る。必要なのは装置と反応する意識だけなのだ。

「これからが楽しみだな」

イナザギは無表情のまま窓辺から、奥に設置さ
れた監視モニターまで歩いていった。

「絶対なにかあるわ！」と声を荒げる彼女は、や
はりメールを見てすっ飛んできたという神崎リエ
子。となり街の学校に通う女子高生であった。

現在は近くのさてんで、ドリムとランチを共に
している。彼女もドリムと同様、朝食ぬきでやつ
てきたひとりだ。

ドリムはファンタジー関係の創作活動を行って
いるが、彼女はその受け手であり、そっち方面の
知識は豊富だった。自分と同じく、異世界の存在
を信じきっている。いや、ごく「普通」だと考え

ているようで、すぐに打ち解けられた。(でもこれ、
新手の出会い系サイトの勧誘とかじゃないよな…
…)

「あの、神崎さん？」とドリムは上目遣いに、パ
フェをほおばる彼女を見やった。

「リエ子でいいわ。あたしもドリム〜って呼ぶ
から。素敵な響きよね」

彼女は満面の笑みをうかべ、こちらを見つめ返
してきた。(これまでこの名前を、素敵なんて表現
したひと、いたかな？ もう勧誘されていいか
も！)

ふたりは腹ごしらえをしたのち、研究施設の裏
口から様子をうかがうことを決めていた。ドリム
が最後のひと口を終えると、楚々とした彼女はレ
シート片手に立ち上がった。

「作家さんはビンボーでしょう。その代わりなに
かあったら、あたしを守ってよ」と腰に手を当て

て、整った顔を近づけてくる。

こうしてふたりは、さてんを後に建物の裏口へ移動していった。しかし、そこは正面玄関と打つて変わり、無防備な勝手口が風に揺らめいている状態だ。ドリムはリエ子……氏（出会ってそうそう、ファーストネームで呼び合えない！）に背を押される形で敷地へ侵入し、やはり半開き状態の通用口を眺めまわした。

「うす暗いけれど、人の気配はないな。入ってみよう」

小声で彼女を呼び、ふたりは背を丸めて通用口を通過していく。そのまま暗い通路を進むと、その歩みを阻むように、金属製の丸いハッチが現れた。堅固そうなハッチのかたわらには、IDカードを通す端末があるけれど、それ以外に開錠できそうなものはない。

自分たちのちよつとした冒険談も、ごく平凡に

終わるのかな。

そのとき、リエ子氏が歩み出てIDカードらしきものを、端末に通した。途端、にぶい電子音とともにロックが解除される。ドリムは目をみはつてたずねかけた。

「リエ子さんは関係者……だったの？」と、やはり「勧誘」のことがドリムの頭をよぎり、メールを見たとき覚えた衝動的な気分に対し、自嘲した。どうも自分の頭は、夢見がちな小学生のときから、あまり変わっていないらしい。

「いいえ、警備員さんから失敬したのよ」

彼女は微笑みながら、したたかに告げた。一本とられたなと思いつつ、ドリムは開かれたハッチの向こう側を目で探った。

そこはかなりの大部屋であったが、やはり電灯などはついておらず、人の気配も感じられない。

ドリムは率先してふみこみ、彼女を手招きした。

やがて暗さに慣れてきたドリムの目が捉えたものは、大小様々な電子機器とそれらの中央に位置する、半透明の円柱だった。さながら氷の塔とも呼べそうな円柱は紫色の光彩を放ち、独特なオーラを漂わせている。

「なにか、こう、あの円柱に呼ばれている気がするな」とドリムはささやく。対してリエ子氏ももうなすき「あたしも同じ」と応じてきた。ふたりでそろそろと円柱に近寄った矢先、円柱が七色の光を猛烈に放った。と同時に周囲の電子機器が目まぐるしくLEDを点滅させ、男性の張りつめた声が響きわたる。

「シ、シンクロしました！ 成功です。イザナギ社長！」

「ごくろう。データの収集をつづけたまえ」

とつさにドリムは単純なワナにはまったことを察したが、もう手遅れだった。

天井に備えつけの電灯が強烈に辺りを照らし、ふたりを取り囲むよう、警備員たちが駆け寄ってきたのだ。唯一の脱出路だったハッチも、機械音を発して拔かりなく閉じた。

そして金属製の階段からは音を立てて、大柄な男性が降りてくる。単にこちらを不法侵入でつかまえる気なら、警備員にまかせておけばいいだけのこと。イザナギと呼ばれた社長らしき人物、自らが、お出迎え、するのはおかしいし、なにより研究者と思しき白衣の面々も次々に現れているのだ。

ドリムは後ろ手で彼女を隠すように守り、男性と真正面から向き合った。

「シンクロだと？ なにを企んでいる！」と大声を張った。だが相手に動じるそぶりは見られない。ドリムはすでに、警備員に正面からはがいじめにされている。



彼がもう一度になると、イザナギと呼ばれた男性は大仰おおびやうなしぐさで、なにかを掴つかむふうふうに、手のひらを天井へ向けた。

「君たちのおかげで、異世界との巨視きよしてき的トンネルが確立かくりつされたのだよ。これで宿願しゆくがんだったポーシヴの入手が可能になる」

危機きき的な状況じようきやう下であるにもかかわらず、ドリムは「異世界」や「トンネル」との言葉に関心を向けるには得られない。背後はいごの彼女も「ポーシヴ？」とたずねたけれど、その声はどこかしら明るかった。

しかし、離れの警備員が地下への出入り口を開いた途端に、ドリムの心に絶望ぜつぼう感がこみ上げてきた。地下からは、同様にここへ侵入したと思われる青少年の、あえぎ声こゑが聞こえてきたからだ。

青少年の失踪事件については、ドリムもニュースで耳にしていた。誘拐ゆうかい組織そしきも、このイザナギ・

コーポレーションだったということ。さらに自分たちも、その仲間入りをするのか？ 侵入してきた通路はおろか他の逃げ場も塞ふさがれ、右から左まで警備員であふれかえっているのだ。

男性は次々に階段を降りてくる白衣の面々へ向かい、指示を出していた。

「貴重なサンプル二体だ、至急しきゆう、脳波のうはを——」

このままでは本当に、あえぐ青少年たちと同じく、自分たちも卑いやしい実験じっけんのサンプルにされてしまふ。そんな連中はこちらを圧倒あつぱうしているためか、若干のスキを見せている。それに自ら進んで実験動物になるとは、考えていないはずだ。

「思いどおりにさせるものか！」とドリムは前方へ、痛恨つうこんのヘッドバットを叩たたきこんだ。

「ぐうっ」

突然の攻撃こうげきは予期よきしていなかったらしい。一瞬、警備員の腕がゆるんだところで、ドリムは体を大

きくねじり、そのままエ子氏の手を引つ掴んだ。

唯一の脱出路はひとつ、可能性もひとつだ！

「行くぞ！」

ドリムは気迫きはくの大声をあげ、全力で虹色にじいろに輝く

円柱めがけてダツシユした。

「行く？ まさか……」と彼女は目を丸くしている。それでも一か八か、異世界へのダイビングについては察してくれたよう。

ドリムが目でたずねかけると、彼女も大胆だいたんに走りながら「守ってくれるんでしょ」こう、いたずらっぽく応じてきた。

と、次の瞬間、ふたりは頭から円柱のど真ん中へ飛びこんだ。ドリムの考えどおり、そこはもう異世界へのトンネルとなっており、ふたりの頭から肩、そして上半身が円柱のなかで分解ぶんかいしていく。

転じてドリムの視界では純粹じゅんずいな赤・青・緑色が分裂するようになり、その中心部には眩まぶしい輝

点が現れた。ふたりはダイビングしたときの勢いそのままに、色であふれるトンネルをぬけていった。

イザナギはふんと鼻を鳴らした後、淡々たんたんとした口ぶりで研究員へ問いかけた。

「まあいい。データはとれているな？」

「あります」と研究員がコンソールを操作しながら、うなずいた刹那せつな。

円柱に肉片にくぺんとも骸骨がいこつとも思える、黒い塊かたまりが浮き出てきた。イザナギはやはりトンネルはできておらず、単に飛びこんだ男女がバラされた結果であるかと予測した。

しかし、その考えは間違っており円柱内部で、塊かたまりが見たことのないものへと整形せいけいされていく。間をおかず円柱から、姿は古代の翼竜といえよう小柄な「ワイバーン」が転ころがり出てきた。

警備員たちはスタンガン片手に身構えているが、ワイバーンのしぐさはどこかもう、あきらめた感じだった。

この光景を見、となりの研究員が早口でまくし立ててくる。

「質量保存則は絶対的な法則でした。連中と質量を交換する形でこの怪物が現れました！」と興奮気味にデータパッドを持つ手を振るう。

イザナギはやや大仰にうなずき、相手の技術論をとめた。

「なるほど。で、こいつとともにポーシヴもやって来たのかね？」

研究員は興奮したまま、激しくかぶりを揺らした。

「現状まだ保存できず、大気中へ拡散したと思われます。ですが、怪物の体内には残っているかと」

「よろしい。分析を急ぎたまえ」

途端、研究員たちの知識に飢えた冷徹な目が向けられ、ワイバーンが心持ち細長い頭を垂らしている――。

やおら光の通路をぬけたドリムとリエ子は、湿度けいたうす暗い空間に胸から叩きつけられた。背後で輝いていた光は、一瞬にして消えてしまった……。これで帰り道は失われたということ。

いや、全面石造りのここはどうやら地下牢らしく、石の隙間から微かに光が差している。あの装置は、幻覚作用をもたらす武器かなにかだったのかもしれない。結局、脱出できずに、自分たちは地下へ監禁されただけなのか？

そんな考えは、頭上より聞こえてきたハープを鳴らすように高く、おっとりとした声にさえぎられた。

「求む！ ドラゴン・ライダー」

「え!？」

ふたりに期待をこめて顔をあげると、そこには四肢を鎖で拘束された赤銅色のドラゴン! が口元をめくり軽く牙を見せていた。もたげられた首は長く、また滑らかで、流れるように大岩なみの胴体へつながつている。半ばおぶさる形で倒れこんでいたりエ子氏は長髪を揺らして、とっさに飛び起き、悲鳴をあげた。

「うわわ、すごい! 本物よ、本物のカップボードラゴン!」と彼女はドラゴンの鼻先まで走り寄った。彼女には自分と同じく驚きこそあれ、おびえるそぶりはまったくない。

「えっと、あの、触ってもいいですか?」

「どうぞ、ご遠慮なさらずに」と、太い手足を折って身を伏せたドラゴンの口調は、とても丁寧だ。

弓なりに曲げられたりしい尾も、床に寝かさされている。攻撃の意思はないな。

ドリムも決して幻とは思えない相手（現にエ子氏はペタペタと触っている!）に純粹な好奇心を覚え、小部屋ほどの相手へ話しかけてみた。「Eメールをくれたのは、あなただったんですね」と立ち上がり、あいさつするべく背すじを正した。

確か電子は、地球の連中が告げたトンネル……効果だったかにより、色々なカベを通過するらしいから。仮に異世界から電子がやってきけていても、今までわからなかっただけで、理論に反することではない。

「はい。想いが通じると信じて、毎回、わたし自ら発信していました。やっと通じた……」

うなずくスリムな鼻先を見つめながら、ドリムは考えを口にする。

「あのメールからくみとれた微妙なセンスは、あなたの想いだったのか」

流線型で二本の角を生やす、ドラゴンの頭部がゆるやかに振られた。

「きっとポーシヴのお陰でしょう。今もこうしてお話ができますから」

「そうですね」

ポーシヴについては男性も「手に入れられる」と話していた。これらは重要なものなんだろうな。

ヴィラーネと名乗った目の前のドラゴンによれば、ポーシヴは意識と物質とを結びつける存在だという。相手の言葉をそのまま受けとめるのなら、自分は電気信号に混じっていたのであるう、わずかなポーシヴを感じたことになる。

不思議なメールからは、このヴィラーネと近い本物の雰囲気^を、しかとくみとれていたのだ。

ここで、まだぼんやりとメルヘンチックな面持ち^で、なによりうれしそうにドラゴンを眺めて触りたおすりエ子氏が、会話に加わってきた。その

態度と裏腹に、彼女の言葉はやや緊張している。

「そんな未知の物質が悪者の手に渡ったら……」

と彼女は最後まで言葉をつづけなかった。そう、自分たちのせいで、それは現実のものとなりつつあるのだ。

四肢の拘束具を揺らして立ち上がったドラゴン・ヴィラーネは、さらに恐ろしいことを伝えてくる。

「こちらの世界を制圧しようとしている皇帝ダカルシアは、すでにポーシヴを自在に操っています」——勃発する戦乱を治め、この世に永遠の安らぎをもたらす者とならん。

こう銘打ち、まき起こる反抗運動を圧倒的な力でねじ伏せているらしい。この不毛な争いはすでに四〇〇年近くつづき、まったく先が見えない状態だという。

そこで焦れた皇帝は地球（イザナギの連中。た

ぶんとンネルを完成させて、武器かなにかを求めているんだ！」とつるみ、このヴィラーネをおとりに使った……。

こちらの目をひたと見つめてきたヴィラーネが、少し声高に話を進める。

「あなた方は延々とつづく時の輪の「外」から来た人間です。時の輪を断ち切れるかもしれない。ダカルシアもきつと異変に気がついたでしょう。どうか、早く逃げて！」と言葉の最後は、嘆願口調だった。こんなヴィラーネはわずかな可能性に夢を託し、メツセージを送っていた……。

大きな彼女（声の感じと雰囲気からそう思える）の言葉にも一理あるけれど、非力な人間にいったいなにができるよう。

さっきだって逃げるので手いっぱい、自分はないにできなかつたんだから——。

ドリムは高ぶる気持ちを抑え、平然としたそぶ

りでヴィラーネへ呼びかけた。

「一緒に逃げましょう。あなたはドラゴン・ライダーを……、乗り手を求めていたんでしょ」

「わたしは……」

ドリムはドラゴンの黄色い瞳に宿る希望を、見逃しはしなかった。そう、あの一文には、ヴィラーネ自身の願いもこめられていたはずなのだ。

しかし当のヴィラーネは、本当に打ち震えた感じに四肢の鎖を鳴らし、ほつりとつぶやいた。

「ああいけない。番兵が来てしまった」

ドリムが背後を見やると、そのとおり薄暗い地下牢の先から、石造りの床を揺らす、にぶい足音が近づいてきていた。

今度は相手のふいを突いて逃げることもできないだろうし、なにより悲しそうな目つきをしたヴィラーネを残してはいけない！

床にシルエットが伸びてきたとき、リエ子氏の

甲高い声が耳に飛びこんでくる。

「あ、相手は半人半牛のミノタウルスよ！」

すぐさま闇のなかから、頭にねじれた角を生やし、牛の顔をした大柄な相手が現れた。腰には獣の皮をつけ、手にはどんな生き物でもえぐり殺せそうな、鋭いヤリを持つている。地球ではギリシア神話や、クレタ島にある神殿の逸話で有名な怪物だ。

そんな相手はダミ声で、前置きぬきに問いかけてきた。

「お前は皇帝陛下へ永遠の忠誠を誓うか？」

「くそくらえ！」

それがドリムの答えだった。彼は身をひるがえして、果敢にミノタウルスと対峙するが相手の口からは、冷淡な言葉が出てくるだけだった。

「ならば謀反人として排斥させてもらおう」

直後にミノタウルスが腕を振り上げ、防ぎよう

のない鋭利なヤリをドリムの体へ向ける——たつた、これだけのことで殺されるのか？ イヤだ、僕はまだこんなところで死にたくない！ せめてヤリが木製なら、叩き折るくらいはできていたであらうに！

刹那、ドリムの体に突き立てられようとしたヤリは、ヤナギの枝のごとく奇怪に折れ曲がった。

即座に後ろへ跳ね飛んだドリムは目をみはって、驚きの声をあげる。

「どうして……。ヤリが僕のイメージどおりになった？」

「ポーシヴがあなたの意識に反応したのです！

あなたもポーシヴがあつかえる！」

ヴィラーネから、彼女の息がかかるほどに強い言葉が届いた。これがポーシヴの力。それならば相手を封じる策はある——。瞬時、息をこらしたドリムだったが、彼は頭で木に絡まるツル草を強

く一心にイメージした。

応じてミノタウルのヤリがへびさながらに動き出し、相手の体に一回、二回とどろろを巻くように、絡みついていく。バランスを崩したミノタウルスは動きを封じられ、背中から床に崩れ落ちた。

リエ子氏はドリムのとまりまで駆け寄り、もがくミノタウルスをしげしげと見まわしている。

「さすが創造力豊かなドリムくんよね！」と彼女が腕を振るつた。

「僕の創造力が……ポーシヴを……」

呆然とつぶやくドリムに対し、ヴィラーネは内緒話でもするように、こそっと内容につけ加えた。「あなたの、創造力を決して疑わない心が働いたのですよ」

転じてリエ子氏はヴィラーネのたもとまで戻り、拘束具をカチャカチャとやりだした。

やがて、鋭く高い音を発した鎖のひとつが外れた。ドリムの驚きを前に、小さな彼女は動じる様子もなく話しかけてきた。

「あたし、ヴィラーネさんにつけられた器具の形をずっと探ってたの。だからカギの形がすぐにはわかったわ」

ドリムも彼女をまねて、腕を大きく振るつてみせた。

「このミノタウルスからひったくつたのか！」

途端、彼女の声がちちらを威圧するよう低くなつた。

「それ、失礼な表現よね。ドリムくんもバカ正直に答えないでよ。こんな場合は、話を国会みたいになうやむやにしたところで、背後からガツンでよかつたの」

ドリムはかろうじて反論をのみこみ、過激な彼女がヴィラーネを拘束から解き放つのを待った。

すぐさま体の自由を取り戻したヴィラーネは、礼を述べてくるだけで一緒に逃げ出そうとしない。「わたしは戦いが苦手ですから……」と言葉をにごしていく。ドリムはヴィラーネの目がすまなさそうに泳いでいるのを見つめ、彼女が陥っているジレンマを察した。

いざ「外」の人間を招き入れたものの、それは皇帝への戦いをむりじいすることであり、彼女自身もおそらくドラゴン一族を危険にさらして、戦いのノロシをあげることになる。

ヴィラーネのやさしい心に、ためらいが現れたのだ。

もちろんドリムの心にも、たくさん迷いは顔を出している。ヴィラーネの話し振りでは「トンネル」を作れるのはどうも、皇帝の知識が入ったイザナギの装置だけのようだから。

だけど自分はこんな異世界へ招かれ、なおかつ

ちよつとした「力」をあつかえるのだ。これには、なにか運命的な繋がりのようなものを感じずにはいられない。

ドリムは転がっていた金属の鎖をそつと手にし、沖縄で咲き乱れるハイビスカスをひたむきにイメージした。こんな忌まわしい鎖なんていらぬ！
すると鎖は見ている間に、イメージどおりの豪快な赤き花々へと変わっていく。

自分が「作つた」花を眺めていると迷いよりも、だんだん冒険心の方が大きくなってきた。

「僕にはこの程度の「力」があるみたいです。ちつぽけかもしれない。でも時のループを絶つ可能性にかけてみませんか？」

これは自分自身の迷いを、吹っ切るための言葉でもあった。リエ子氏へ目配せすると、彼女も確固と首を縦に振ってくれた。

やおら、ヴィラーネの顔つきが明るくなった。



そう、力は大きい小さいの問題じゃない。どう使うか、それ次第で無限の可能性を發揮するものだと、自分は信じている。

戦火にまみれた世界を、こんな花でいっぱいにするんだ！

まるでドリムの意思をするように、ヴィラーネの眠れる翼が最大限に開かれた。

爆裂！

その先端部は地下牢の石壁を突き破り、即席の脱出口を生み出していく。大きな彼女はドリムとリエ子に覆いかぶさる形で、残骸の雨からふたりを守り、前足で右の広い空間を指し示した。

「ここはまだダカルシアが実験を行う施設の内部です。行きましよう」

こうして三人の脱出劇が始まった。

(2) 生と死と肉体の「融合」

ドリムとリエ子は施設内を走り、ヴィラーネは四足のまま、やはりこちらへ覆いかぶさる体形で守りに徹してくれている。散発的にミノタウルのヤリが飛んできたものの、彼女の体はそれらを易々とはじき返してしまふ。

「やっ！」

応じてドリムが頭に力をこめ、ヤリをうごめく鋼色のツル草と変え、相手の動きをとどめていった。変形したヤリで、ぐるぐる巻きとなったミノタウルスが倒れていく。

ドリムはその間も、次の一手を考えていた。

これだけ派手に騒ぎを起せば、他に囚われていであろう生き物たちにも、脱出の好機がめぐってくると思う。大勢を逃がす場合の定石は、た

しか安全な脱出路の確保と、相手の注意をそらす
おとりが重要だったはずだ。

そう信じ、ドリムは迫り来るミノタウルスたち
をとどめていった。石畳にはヴィラーネの派手な
足音と、緊迫した高い声もエコーしている。

「こちらです！」

皇帝の実験施設とされる建物は大きく、ドリム
とつて、ここは海外の古代神殿を連想させた。ま
た、内部の空間も広く、太い柱などが遮蔽物とな
り、さながら現場は迷宮と化していた。大きな彼
女の案内がなければ途方にくれていただろう。

しかし、要所要所にある光景は禍々しいものだ
った。

数多のガラスケースに人間とワイバーンや、ド
ラゴンと海蛇などが中途半端に体を融合させられ
た形のまま、陳列してあるのだ。みな、もだえ苦
しむ表情をうかべ、絶命している。そのうえ各部

に大きな腫瘍ができ、内臓が体からはみ出して
る遺体も多い。

「こ、これが皇帝のいう、永遠の安らぎかよ！」

ほおを歪めてはき捨てるドリムに対し、ヴィラ
ーネは顔を下向け、物静かな口ぶりで応じてきた。

「ダカルシアも生き物です。自身の寿命が尽きる
前に、目的を達成しようと焦っています」

「これは？」

ドリムはとなりのケースにためられている粘
度の高い液体を、不機嫌な調子で指差した。

「臓器移植用のジェルです。細胞がガン化してい
きますが、短時間なら生体の融合を可能にする物
質」と大きな彼女は、どこまでも平然とした口ぶ
りだった。

ヴィラーネはあえて感情を抑えているのだろう。
だが淡白な物言いに、ドリムは少々の腹立ちを覚
えた。

一方、しかめっ面で口元を押さえるリエ子氏は、うなるように言葉を発した。ドリムの気持ちに彼女が代弁してくれる。

「むりやりの融合で……安らぎなんて得られっこないわよ」

「そうですね」とヴィラーネ。頭を下げた大きな彼女が真っ先に走り、肩から施設の壁へ突っこんだ。直後に猛烈な爆音が轟き、ついに外界への……異世界への本当の出口が作られた。

ため息混じりに首を振るうヴィラーネを見て、ドリムは彼女の真意を察した。ヴィラーネは戦いが苦手なのではなく、むしろ強大な破壊力を持つ自分自身が怖いのだ。

ドリムにとってもそれは同じで、もしもポーシヴを操る力をセーブできなくなったら——、その力におぼれたらという強迫観念でいっぱいだった。現に賢者でも偉人でもない、ただの自分が猛牛ミ

ノタウルスすら間接的に、あしらう力を身につけてしまったのだから。

……やってみる前からプレッシャーに押しつぶされてどうするの？ そのときが来たら、改めて考えればいい。

ドリムの頭にそんな想いがふつとうかび、彼は負けじと気を戻した。

「まさしく、そのとおりだ」とつぶやくドリム。でもできることなら、〃そのとき〃は来てほしくない。

ドリムはどこからか受け取った想いと、この身にも当てはまることを伝えるべく、ヴィラーネの後ろ足にそつと手をかけた。

「これから力のこと、考えていきましょう」

ドリムは頭に手を当て、イメージするそぶりをしてみせる。ヴィラーネはこちらを振り返り、独り言のようにささやいた。

「……ええ、物質的な力の多くは破壊へつながるもの」

徐おもむろに神殿の裂け目から、みんなで外へ歩み出ると、空は世界の気運きうんを示すかのように陰鬱いんうつな雲に覆おおわれていた。

しかし小雨が降りしきる雲をつき、夜でもないのに色とりどりの星が瞬またたいているのだ。星々はまるで、この世界の生き物たちへ希望を与えるべく、強烈に光を放っていた。

そして離れにそびえる山脈は地球のものと、まったく違う。全体が半透明でエメラルドのごとき光彩を持っているから。それは文字どおり宝石でできた山脈であり、ヴィラーネによれば世界中に点在しているという。

——僕らは完全な異世界にやってきている。帰り道もこの先も、なにもわからないまま……。

こんな驚おどろきと不安感もつかの間、ドリムは背す

じに生き物の温かさを感じ取った。

振り返るとヴィラーネが作った出口を、様々な種族しゅぞくが急ぎ、かいくぐつてきていた。

猛禽類もうきんるいを思わせる顔立ちと、獅子ししも顔負けの体躯たいこをしたグリフィンやワイバーン、水との抵抗ていこうを減らすためであろう、顔や体すべては全体的に丸みを帯びたネッシー似のシーサーペントや、騎士きしふうな若い人間の姿もある。

「みんなどうやって……」と言葉を失うドリムの問いには、立ち止まって頭を下げてきたグリフィンが丁寧ていねいに応じてきた。だがその顔つきは、憔悴しょうすいしきっている。

「突然、鎖くさりが見たことのない花に変わって……。あととはあなたたちが、逃げる機会を作ってくれました」

「僕の花が……こんなに」

「え、あなたのお花？」と、相手は不思議そうな

面持ちとなつた。

あれはヴィラーネに見せてあげる花だったのに、あの力は施設全域におよんでいたのか？ ましてや皇帝は、こんなにも多様な生き物たちを融合させるつもりだったのか？ あまりにもナンセンスな行為だ。

対する自分はイメージの力を（今回はよい方へ転んだものの）、うまくコントロールできていない。そんな相手も「一族みんなが……、わたしは行かなければ」と叫び、足早に飛び去っていく。

逃げまどう種族のなかには何頭かのドラゴンも混じっているが、彼らはどうしてヴィラーネと同じく、忌まわしき施設を破壊しなかったのだろう。

たぶん突然の騒乱に、はたして便乗していいものか迷っているのかもしれない。派手に「安らぎ」から逆らったとバレた場合の、責めを恐れているんだ。

みんなが一致団結すれば、決して負けはしないように思えたけれど、皇帝の力を前に、この世界はすでに敗北の気運でみだされている。逃げるみんなは保身が最優先で、一切、菌向かおうとしなから。これでは戦う以前の問題だ。

ここで野生の吼え声が入る。ドリムが一帯を目で探ると、角ばった実験施設の反対側より、別の生き物が舞い上がってきた。相手は鬼そっくりの体つきをしながら、背にはコウモリの翼を持つガーゴイル！ 厳つく黒い体が不気味な光沢を放っていた。

ダメだ、みんなの脱出はまだつづいている――。

体格的にはガーゴイルの方が下だが、その数は獲物を食らい尽くすアリの群れほどに多い。連中にまとわりつかれたら、ひとたまりもないだろう。

「まずいぞ。どうにか食いとめないと！」

ドリムの叫び声を聞いたらしいヴィラーネは、

なにかを決意したような表情で四肢を折つて身がかがめた。彼女は乗れといわんばかりに、頭も下げてくれている。

こんな赤銅色のドラゴンに駆け寄ると、そのウロコには階段状のくぼみがあった。さらにドリムがよじ登っていくと、首元付近の背びれ二枚は「八」の字状に折り曲げられ、それは座席そのものの形をしていた。

「……前にも、ヴィラーネさんは誰かを乗せて飛んでいたんだね」

「わたしには——いえ、はい、そのとおりです」

ドリムの問いかけは不自然な言葉で返された。

さらにヴィラーネが右、左と体を傾けて立ち上がったため、それ以上はたずねられない。今のドリムは、目の前に伸びる背びれに掴まるので精いつばいだ。

「早く慣れてくださいね。空はとても高いですよ」

と大きな彼女から、さも面白そうな響きの声が出てきた。一方、からかわれたドリムには応じる余裕すらない。

そんな彼の心といえよう雨も、いよいよ本降りとなってくる。ドリムがこわごわ顔をあげると、そこはもうビル三、四階ほどの高さだった。なにより目の前には先鋒のガーゴイルが現れ、猛スピードで突つこんできていた！

ヴィラーネではなくドリムめがけて——。

ガーゴイルは小柄な分、ドラゴンより小回りがきく。ヴィラーネが体を転回させようとしているけれど、まったく間に合わない。

「速い、やられる！」

そのとおり、ドリム自身が叫ぶ死刑宣告だった。自殺未遂者の話によると死ぬ間際は、ときの流れが遅くなるらしい。現在、彼の目にする光景はスローモーションと化していた。

ガーゴイルの奇怪に歪んだカギ爪が、下腹部に
めりこんでいく。

「う……う」

それでもドリムは、自身に課した使命を忘れな
かった。ガーゴイルの群れを飛べなくするため、
イメージして雨粒をオイルに変えたのだ。空気に
対する比重が高くなれば、小さな翼では体を支え
きれないだろうから。

分子量の変化が可能だなんて、ポーシヴはまさ
しく錬金術だ。有用なものにも、害悪なものにも
簡単にできる。と、また少しドリムの上半身と下
半身が裂けていった。

ガーゴイルたちは羽ばたきの増加で対処しよう
としているが、その場にとどまるので限界といっ
たところ。これで連中の足どめはできた。

（みんな、この間に逃げてくれ！）

いよいよドリムの体がふたつに裂け、上半身と

下半身が回転しながら地に落ちていった。

「わたしは……、また乗り手を失った。お話もほ
とんどできていなかったのに……」

そう、ヴィラーネは首元にあった久々の接触感
に、うかれていたのだ。飛べない人間に空の楽し
さを知ってもらおうと、いつとき危険な戦乱の真
っ只中であることを忘れていた。

そのうえ、自身の力におびえて一切なにも、な
にもできなかつた——。

途端、ヴィラーネは体内で、第二の自分が目覚
めるのを感じ取った。しかし、あえて抑えること
はしなかつた。きつと「これ」が本当の自分で、
今の自分が偽りの精神なのだから。

「さようなら、わたし……」と気張っていた心の
力をぬいた。

やおら流線型をしたヴィラーネの鼻先が機械的